



たいしも通信

本稿が皆様のお手元に渡る頃には、いよいよ年の瀬となっていることと思います。ところで「年の瀬」とは実際にはいつなのかというところ、一般的な「12月」の他に、書物によると、12月も押しつまってから、ともあります。特に13日に正月の準備にかかる地方が全国的にも多く、その頃から年の暮の実感が生まれてくることからだそうです。

さて、今年の正月は大きな災害から始まってしまいました。来年こそは皆さまや現職自衛官にとって安らかな一年となりますよう祈念いたします。これらのことを踏まえて、今回は最近の防衛関連ニュース第2弾を明るく(?)お送りいたします。

◆「或る輸送艦」の進水式

令和6年10月、内海造船瀬戸田工場(広島県尾道市)において新たに建造された輸送艦の命名式および進水式が挙行されました。「にほんばれ」と命名された同艦は、「小型級船舶」と呼ばれる自衛艦艦級の1番艦として建造が進められていたものです。サイズは全長約80m、基準排水量約2,400トンで、乗員数は約30人。輸送性能は数百トンで、車両十数両または20フィートコンテナ十数本程度の積載が可能。速度は15ノット以上となっていますが、岸壁や砂地に離着岸し、船首のランプ(乗降ゲート)から車両等の搭載と陸揚げを直接行うビーチング能力を保有しています。

配備先は本年度末に広島県の呉に新編予定の陸海空3自衛隊共同の部隊「自衛隊海上輸送群(仮称)」で、操艦・運用にあたっては陸自が主体となる予定です。このため、進水式では「軍艦マ―チ」ではなく、陸自の行進曲「陽光を背に」が演奏されました。

◆なぜ陸上自衛隊に艦艇が?

南西諸島防衛のため、陸自は「水陸機動団」を発足するなど、

従来の北方重視から離島防衛にシフトしてきました。この離島防衛には海上輸送力が不可欠なのですが、海自の輸送艦艇は3隻の「おおすみ型」輸送艦、あとは退役間際の輸送艇1号型のみという状況で、現状では海上輸送力が圧倒的に不足しており、民間フェリーもチャーターしています。次世代輸送艦等も考えているようですが、これらを整えるには時間がかかり過ぎます。こうした状況をふまえ、陸自は海自とともに「海上輸送群」を創り、独自に輸送艦を運用することにしたということです。

先の大戦においても、陸軍が海軍とは別の揚陸・輸送用船舶部隊の保有は、日本だけでなく米陸軍でも大々的に行われていました。しかし帝国陸軍のものは、舟艇格納庫を有するだけでなく、偵察・爆撃機をいわゆる艦載機として搭載し陸部隊の支援用として運用可能であり、これら極めて先進的な機能は、ほぼ世界初となる強襲揚陸艦・ドック型揚陸艦と呼べるものでした。

◆今後について

防衛省では新編する海上輸送群(仮称)向けに、「にほんばれ」の同型艦を今後3隻、より大きな基準排水量約3,500トン超の中型級船舶を2隻、小型の機動舟艇4隻、合計10隻を本年度末までに配備する計画です。

▼編集後記▲▲

「にほんばれ」という艦名は多くの人にとって想定外だったようで、SNSでは以後の艦名について大喜利状態(予想合戦)となっており、「ふんばれ」「がんばれ」「あっぱれ」「ねたばれ」という韻を踏んだものや、コメの品種みたいということから、「はえぬき」「ゆめぴりか」「コシヒカリ」などというもので挙がっていました。そんな中、中型級船舶の1番艦が令和6年11月に進水し、「ようこう」と命名されています(オチは無い)。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。